

同一性と因果関係

横路 佳幸(慶応義塾大学)

同一性は単純である。あらゆるものは自身と同一で、自身以外のものと同一であることなどありえない。それゆえ、この意味では同一性はまったく問題とはならない(unproblematic)。

おそらくこうした説明は、直観的にも形式的にも正しいだろう。同一性そのものを論じる機会がこれまでそれほど多くなかったのも、そのためかもしれない。しかし、本発表の目的は、そのような説明とは独立に、同一性そのものが、それだけで立派な哲学的議論の対象である可能性を示すことにある。その検討は、一見無関係にも思われる同一性と因果関係(causal relation)の二つの関係を比較しながら、進められることになる。それによって、デイヴィッド・ヒューム以来、多くの哲学者にとって論争的であり続けてきた因果関係と比べて、同一性がそれと似通った問題意識を持つ点で同等か、もしくはそれ以上に問題となりうることが示されうる。もちろん、冒頭で述べられた文脈では、同一性はまったく問題とはならない。きっと誰も、その意味での単純さを否定することはできないだろう。だが、「関係(relation)」の分類を軸とした文脈においては、同一性は、因果関係以上に厄介な問題をいくつも抱えた関係であることが、本発表の中で明らかになる。したがって、この意味では同一性は問題となる(problematic)のである。

本発表は次のような具体的な構成から成る。第一に、同一性が一般にどのようなものであるかを簡単に確認したのち、デイヴィッド・ルイス(Lewis (1999), p. 26, fn. 16; and *ibid.*, p. 129)にしたがって、同一性もその一種である、「関係」の多少細かい分類、すなわち内的/外的および内在的/外在的という二つの区別を導入する(第2節)。ここまでが準備である。第二に、前者の分類に従って、同一性が内的であるかどうかを検討していく中で、個体に関する形而上学において論じられがちな不可識別者同一の原理の妥当性と、この問いが密接に関わることを明らかにする。それは、その原理の妥当性に未だ大きな論争がある以上、同一性が内的な関係であるかどうかもまったく不透明であるという帰結を生む(第3節)。第三に、今度は後者の分類に従って、同一性が内在的な関係であるかどうかを検討する。だが、その問いは因果関係の内在性もしくは外在性をめぐる一連の問題と類似した構造を持つことにくわえて、同一性のケースでは特に、「このものの性(thisness)」や「個別化(individuation)」などが同一性の内在性/外在性と関連することが指摘される。そうして、この問いの答えもまた明らかでないことが導かれる。というのも、内在性/外在性のどちらを取ったとしても、同一性について問われるべき問題は残るからである(第4節)。最後に、因果関係とおなじく同一性は、即座には解決できない問題を複数抱えている関係であると結論付けられるが(第6節)、その前に今後の展望という形で、同一性に関する私自身の立場を素描する(第5節)。それは、デイヴィッド・ウィギンズによって先鞭がつけられたと発表者が解釈する、同一性の内在性と外在性の融和を唱える立場である。とはいえ、本発表ではそれを提示するだけに留めたい。本発表が目指すのは、問題の解決ではなく、因果関係と比較しながら、あくまで同一性について問題を提起することなのである。そして、そのことは結果的に、これまで別々の文脈で論じられてきた、同一性に関する諸問題を整理する役割も同時に果たしていることになるだろう。